

病める薔薇

短篇集

佐藤春夫著

病める薔薇

短篇集

佐藤春夫著

東京

天祐社

MDCCCCXVII

大正七年十一月廿三日印刷
大正七年十一月廿八日發行

病める薔薇

定價壹圓六拾錢

著者

佐藤春夫

發行者

東京市麴町區飯田町一丁目二番地
株式會社 天佑社

代表者 小林政治

發行所

東京市麴町區飯田町一丁目二番地
株式會社 天佑社

電話 番町(長)二二七九番
振替口座東京二〇二三八番



印刷所 東京市京橋區西紺屋町廿七番地
株式會社 秀英舍

印刷者 東京市京橋區西紺屋町廿七番地
佐久間衡治

序

友人佐藤春夫君の最初の著作集、病める薔薇が今度天佑社から出版されることは、予に取つても此の上もない愉快である。予は予の著作が出版されると同様の樂しみを以て、此の著が一日も早く書肆の店頭へ出づることを期待して居る。

佐藤君の藝術の眞價に就いては、予は從來幾度か筆に口に賞讃の辭を惜しまなかつた。予は予と同君との交際があまり親密であるのを顧慮して、幾分か控へ目にして居たのではあるが、それでも猶且同君を褒めずには居られなかつた。さうして、同君の如き稀なる天分を有する作家が、長く文壇から認められずに居たのを私かに慨いて居た一人であつた。然るに、最近に至つて漸く同君は中央文壇に活躍する機會を掴み、次いで此の著作集の出版となつた。友人としての予の欣びを

想像して貰ひたい。

本書に收められたる數種の物語のうち、予は何よりも「指紋」を好む。

蓋し「指紋」は最もよく同君の特色を發揮したものであらう。その憂鬱な一句一句讀者の神經へ喰ひ入つて行くやうな文字の使ひ方、一つ一つ顫へて光つて居る細い針線のやうな描寫は、悽愴にして怪奇を極めた幻想と相俟つて、そゞろに人を阿片喫煙者の惡夢のうちへ迷ひ込ませる。その他、月夜のやうに青く、蜘蛛の巢のやうに微かにおのゝける情操を以て貫かれた「病める薔薇」と云ひ、眞珠の如く清楚に蜃氣樓の如く纖麗な「李太白」と云ひ、巧緻にして輕快なる「西班牙犬の家」と云ひ、いづれも同君の豊富なる空想と鋭敏なる感覺との產物ならざるはない。

今日の文壇の或る一部——否、寧ろ大部分には、空想を描いた物語を一概に「拵へ物」として排斥する傾向がある。しかし、古往今來の詩人文學

者にして、嘗て空想を驅使しなかつた者があるだらうか。たとへ自然派の作家であつても、空想力に乏しくして果して眞實を表現することが出来るだらうか。若し藝術の領域から空想を除いてしまつたら、いかにして藝術が成り立つだらうか。予の考へを以てすれば、空想に生きる者のみが藝術家たり得る資格があるのである。藝術家の空想が、いかに自然を離れて居ようと、それが作家の頭の中に生きて動いて居る力である限り、空想も亦自然界の現象と同じく眞實の一つではないか。空想を眞實と化し得てこそ、始めて藝術家としての生きがひがある。と云ふものである。「病める薔薇」の著者の作物が萬一「眞實に立脚して居ない」といふ理由の下に批難を蒙ることがあるとすれば、予は著者に代つて以上の如く答へんとする者である。

大正七年九月

谷崎潤一郎

自序

これは自分の最初の著作集である。自分はこの集の諸篇に就ても未だ充分満足しては居ない。校正刷を見て今更にこの感が深い。就中、必要上期日を期して書くやうになつた最近の作品に於て殊にさうである。若し、この後に機會があり、且つその時にも自分がまだこれらの作品を忘れ難かつたならば、自分は尙一層改刪するであらう。けれども自分としてそれ以上に願ふところは、一時も早くこれらの諸篇に何の未練も無くなるやうな別のものを生み出したいことである。

自分はこの著を自分の父と母とに捧げるつもりである。この二人の人は、この書の出版に就て、恐らく最も無批判にさうして最も多く喜んでくれる人であらうから。

大正七年十月

佐藤春夫

目 次

序	i
自序	v
西班牙犬の家	1
病める薔薇	17
田園の憂鬱	17
歩きながら	147
圓光	159
李太白	175
戦争の極く小さな挿話	229
或る女の幻想	241
指紋	275
月かけ	351

西班牙犬の家

(一九一五年十二月作)

西班牙犬の家

(夢見心地になることの好きな人々の爲めの短篇)

フラテ(犬の名)は急に駆け出して、蹄鍛冶屋の横に折れる岐路のところへ、私を待つで居る。この犬は非常に賢い犬で、私の年來の友達であるが、私の妻などは勿論大多數の人間などよりよほど賢い、と私は信じて居る。で、いつでも散歩に出る時には、きつとフラテを連れて出る。奴は時々、思ひもかけぬやうなところへ自分をつれてゆく。で近頃では私は散歩といへば、自分でどこへ行かうなどと考へずに、この犬の行く方へだまつてついて行くことに決めて居るやうなわけなのである。蹄鍛冶屋の横道は、私は未だ一度も歩かない。よし、犬の案内に任せて今日はそこ

を歩かう。そこが私はそこで曲る。その細い道はだらだらの坂道で、時々ひどく曲りくねつて居る。おれはその道に沿うて犬について、景色を見るでもなく、考へるでもなく、ただぼんやりと空想に耽つて歩く。時々、空を仰いで雲を見る。ひよいと道ばたの草の花が目につく。そこで私はその花を摘んで、自分の鼻の先で匂うて見る。何といふ花だか知らないがいい匂である。指で摘んでくるとまわし乍ら歩く。するとフラテは何かの拍子にそれを見つけて、ちよつと立とまつて、首をかしげて、私の目のなかをのぞき込む。それを欲しいといふ顔つきである。そこでその花を投げてやる。犬は地面に落ちた花を、ちよつと嗅いで見て、何だ、バスケットぢやなかつたのかと言ひただけである。さうして又急に駆け出す。こんな風にして私は二時間近くも歩いた。

歩いてゐるうちに我々はひどく高くへ登つたものと見える。そこはちよつとした見晴で、打開けた一面の畑の下に、遠くどこの町とも知れない町が、雲と霞との間からぼんやりと見える。しばらくそれを見て居たが、たしかに町に相違ない。それにしてもあんな方角に、あれほどの人家のある場所があるとすれば、一たい何處なのであらう。私は少し腑に落ちぬ氣持がする。しかし私はこの邊一帯の地理は一向に知らないのだから、解らないのも無理ではないが。それはそれと

して、さて後の方^{うしろ}の方はと注意して見ると、そこは極くなだらかな傾斜で、遠くへ行けば行くほど低くなつて居るらしく、何でも一面の雑木林のやうである。その雑木林は可なり深いやうだ。さうしてさほど太くもない澤山の木の前を照して、正午に間もない優しい春の日ざしが、榆や樺や栗や白樺などの芽生じたばかりの爽やかな葉の透間から、煙のやうに、また勻^{にばひ}のやうに流れ込んで、その幹や地面やの日かげと日向との加減が、ちよつと口では言へない種類の美しさである。おれはこの雑木林の奥へ入つて行きたい氣もちになつた。その林のなかは、かき別けねばならぬといふほどの深い草原でもなく、行かうと思へばわけもないからだ。

私の友人のフラテも私と同じ考へであつたと見える。彼はうれしげにすすくと林のなかへ這入つてゆく。私もその後に従うた。約一丁ばかり進んだかと思ふころ、犬は今までの歩き方とは違ふやうな足どりになつた。氣らくな今までの散歩の態度ではなく、織るやうないそがしさに足を動かす。鼻を前の方につき出して居る。これは何かを発見したに違ひない。兎の足あとであつたのか、それとも草のなかに鳥の巢でもあるのであらうか。あちらこちらと氣せわしげに行き來するうちに、犬は其の行くべき道を発見したのらしく、眞直ぐに進み初めた。私は少しばかり

好奇心をもつてその後を追うて行つた。我々は時々、交尾して居たらしい梢の野鳥を駭かした。斯うした早足で行くこと三十分ばかりで、犬は急に立ちとまつた。同時に私は潺湲たる水の音を聞きつけたやうな氣がした。(一たいこの邊は泉の多い地方である)犬は耳を痒性らしく動がして二三間ひきかへして、再び地面を嗅ぐや、今度は左の方へ折れて歩み出した。思つたよりもこの林の深いのに少しおどろいた。この地方にこんな廣い雜木林があらうとは考へなかつたが、この工合ではこの林は二三百町歩もあるかも知れない。犬の様子といひ、いつまでもつづく林といひ、おれは好奇心で一杯になつて來た。かうしてまた二三十分間ほど行くうちに、犬は再び立とまつた。さて、わつ、わつ!といふ風に短く二聲吠えた。その時まで、つい氣がつかずに居たが、直ぐ目の前に一軒の家があるのである。それにしても多少の不思議である、こんなところに唯一つの人の住家があらうとは。それが炭焼き小屋でない以上は。

打見たところ、この家には別に庭といふ風なものはない様子で、ただ唐突にその林のなかに雜つて居るのである。この「林のなかに雜つて居る」といふ言葉はここでは一番よくはまる。今も言つた通り私はすぐ目の前でこの家を發見したのだからして、その遠望の姿を知るわけにはいか

ぬ。また恐らくはこの家は、この地勢と位置とから考へて見てさほど遠くから認め得られやうとも思へない。近づいてのこの家は、別段に變つた家とも思へない。ただその家は草屋根ではあつたけれども、普通の百姓家とはちよつと趣が違ふ。といふのは、この家の窓はすべてガラス戸で西洋風な造へ方なのである。ここから入口の見えないところを見ると、我々は今多分この家の背後と側面とに對して立つて居るものと思ふ。その角のところから二方面の壁の半分づつほどを覆うたたかづらだけが、言はゞこの家のここからの姿に多少の風情と興味とを具へしめて居る裝飾で、他は一見極く質朴な、こんな林のなかにありさうな家なのである。私は初め、これはこの林の番小屋ではないかしらと思つた。それにしては少し大きすぎる。又わざわざこんな家を建てて番をしなければならぬほどの林でもない。と思ひ直してこの最初の認定を否定した。兎も角も私はこの家へ這入つて見やう。道に迷ふたものだと言つて、茶の一杯ももらつて持つて來た辨當に、我々是我々の空腹を満さう。と思つて、その家の正面だと思へる方へ歩み出した。すると今まで目の方の注意によつて忘れられて居たらしい耳の感覺が働いて、私は流れが近くにあることを知つた。さきに潺湲たる水聲を耳にしたと思つたのはこの近所であつたのであらう。

正面へ廻つて見ると、そこも一面の林に面して居た、ただここへ来て一つの奇異な事には、その家の入口は、家全體のつり合から考へてひどく贅澤にも立派な石の階段が丁度四級もついて居るのであつた。その石は家の他の部分よりも、何故か古くなつて所々苔が生へて居るのである。

さうしてこの正面である南側の窓の下には家の壁に沿ふて一列に、時を分たず咲くであらうと思へる紅い小さな薔薇の花が、わがもの顔に亂れ咲いて居た。そればかりではない。その薔薇の叢の下から帯のやうな幅で、きらきらと日にかがやきながら、水が流れ出て居るのである。それが一見どうしてもその家のなから流れ出て居るとしか思へない。私の家來のフラテはこの水をさも甘さうにしたたかに飲んで居た。私は一瞥のうちにこれらのものを自分の瞳へ刻みつけた。

さて私は靜に石段の上を登る。ひっそりとしたこの四邊の世界に對して、私の靴音は靜寂を破るといふほどでもなく響いた。私は「おれは今、隱者か、でなければ魔法使の家を訪問して居るのだぞ」と自分自身に戯れて見た。さうして私の犬の方を見ると、彼は別段變つた風もなく、赤い舌を垂れて、尾をふつて居た。

私はこゝつと西洋風の扉を西洋風にたたいて見た。内からは何の返答もない。私はもう一べ

ん同じことを繰返さねばならなかつた。内からはやつぱり返答がない。今度は聲を出して案内を乞うて見た。依然。何の反響もない。留守なのかしら空家なのかしらと考へてゐるうちに私は多少不氣味になつて來た。そこでそつと足音をぬすんで——これは何の爲であつたかわからないが——薔薇のある方の窓のところへ立つて、そこから脊のびをして内を見まわして見た。

窓にはこの家の外見とは似合しくない立派な品の、黒づんだ海老茶にところどころ青い線に見えるどつしりとした窓かけがしてあつたけれども、それは半分ほどしぼつてあつたので部屋のなかにはよく見えた。珍らしい事には、この部屋の中央には、石で彫つて出來た大きな水盤があつてその高さは床の上から二尺とはないが、その真中のところからは、水が湧立つて居て、水盤のふちからは不斷に水がこぼれて居る。そこで水盤には青い苔が生えて、その附近の床——これもやつぱり石であつた——は少ししめつぽく見える。そのこぼれた水が薔薇のなかからきらきら光りながら蛇のやうにぬけ出して來る水なのだらうといふことは、後で考へて見て解つた。私はこの水盤には少なからず驚いた。ちよいと異風な家だとはさきほどから氣がついたものの、こんな異體の知れない仕掛まであらうとは豫想出來ないからだ。そこで私の好奇心は、一層注意ぶかく家